悲しき玩具

★

石川啄木

悲しき玩具

(一握の砂以後)

*

石川啄木

——(四十三年十一月末より)——

内容

一握の砂以後百九十四首　（歌）
一利己主義者と友人との對話　（感想）
歌のいろ〳〵　（感想）

悲しき玩具

——一握の砂以後——

呼吸すれば、
胸の中にて鳴る音あり。
凩よりもさびしきその音！

*

眼閉づれど、
心にうかぶ何もなし。
さびしくも、また、眼をあけるかな。

途中にてふと氣が變り、
つとめ先を休みて、今日も、
河岸をさまよへり。

*

咽喉がかわき、
まだ起きてゐる果物屋を探しに行きぬ。
秋の夜ふけに。

遊びに出て子供かへらず、
取り出して
走らせて見る玩具の機関車。

＊

本を買ひたし、本を買ひたしと、
あてつけのつもりではなけれど、
妻に言ひてみる。

旅を思ふ夫の心！
叱り、泣く、妻子の心！
朝の食卓！

＊

家を出て五町ばかりは、
用のある人のごとくに
歩いてみたれど——

痛む歯をおさへつつ、
日が赤赤と、
冬の靄の中にのぼるを見たり。

*

いつまでも歩いてゐねばならぬごとき
思ひ湧き來ぬ、
深夜の町町。

なつかしき冬の朝かな。
湯をのめば、
湯氣がやはらかに、顔にかかれり。

*

何となく、
今朝は少しく、わが心明るきごとし。
手の爪を切る。

うつとりと
本の挿絵に眺め入り、
煙草の煙吹きかけてみる。

*

途中にて乗換の電車なくなりしに、
泣かうかと思ひき。
雨も降りてゐき。

二晩おきに、
夜の一時頃に切通の坂を上りしも――
勤めなればかな。

*

しつとりと
酒のかをりにひたりたる
脳の重みを感じて帰る。

今日もまた酒のめるかな！
酒のめば
胸のむかつく癖を知りつつ。

＊

何事か今我つぶやけり。
かく思ひ、
目をうちつぶり、酔ひを味ふ。

すつきりと酔ひのさめたる心地よさよ！
夜中に起きて、
墨を磨るかな。

＊

眞夜中の出窓に出でて、
欄干の霜に
手先を冷やしけるかな。

どうなりと勝手になれといふごとき
わがこのごろを
ひとり恐るる。

*

手も足もはなればなれにあるごとき
ものうき寝覚！
かなしき寝覚！

朝な朝な
撫でてかなしむ、
下にして寝た方の腿のかろきしびれを。

*

曠野ゆく汽車のごとくに、
このなやみ、
ときどき我の心を通る。

みすぼらしき郷里の新聞ひろげつつ、
誤植ひろへり。
今朝のかなしみ。

*

誰か我を
思ふ存分叱りつくる人あれと思ふ。
何の心ぞ。

何がなく
初戀人のおくつきに詣づるごとし。
郊外に來ぬ。

*

なつかしき
故郷にかへる思ひあり、
久し振りにて汽車に乘りしに。

新しき明日の來るを信ずといふ
自分の言葉に
嘘はなけれど——

＊

考へれば、
ほんとに欲しと思ふこと有るやうで無し。
煙管をみがく。

今日ひよいと山が戀しくて
山に來ぬ。
去年腰掛けし石をさがすかな。

＊

朝寝して新聞讀む間なかりしを
負債のごとく
今日も感ずる。

よごれたる手をみる——
ちようど
この頃の自分の心に對ふがごとし。

*

よごれたる手を洗ひし時の
かすかなる滿足が
今日の滿足なりき。

年明けてゆるめる心！
うつとりと
來し方をすべて忘れしごとし。

*

昨日まで朝から晩まで張りつめし
あのこころもち
忘れじと思へど。

戸の面には羽子突く音す。
笑ふ聲す。
去年の正月にかへれるごとし。

*

何となく、
今年はよい事あるごとし。
元日の朝、晴れて風無し。

腹の底より欠伸もよほし
ながながと欠伸してみぬ、
今年の元日。

*

いつの年も、
似たよな歌を二つ三つ
年賀の文に書いてよこす友。

正月の四日になりて
あの人の
年に一度の葉書も來にけり。

*

世におこなひがたき事のみ考へる
われの頭よ！
今年もしかるか。

人がみな
同じ方角に向いて行く。
それを横より見てゐる心。

*

いつまでか、
この見飽きたる懸額を
このまま懸けておくことやらむ。

ぢりぢりと、
蠟燭の燃えつくるごとく、
夜となりたる大晦日かな。

*

青塗の瀬戸の火鉢によりかかり、
眼閉ぢ、眼を開け、
時を惜めり。

何となく明日はよき事あるごとく
思ふ心を
叱りて眠る。

*

過ぎゆける一年のつかれ出しものか、
元日といふに
うとうとと眠し。

それとなく
その由るところ悲しまる、
元日の午後の眠たき心。

*

ぢつとして、
蜜柑のつゆに染まりたる爪を見つむる
心もとなさ！

手を打ちて
眠氣の返事きくまでの
そのもどかしさに似たるもどかしさ！

*

やみがたき用を忘れ來ぬ——
途中にて口に入れたる
ゼムのためなりし。

すつぽりと蒲團をかぶり、
足をちゞめ、
舌を出してみぬ、誰にともなしに。

*

いつしかに正月も過ぎて、
わが生活が
またもとの道にはまり來れり。

神様と議論して泣きし——
あの夢よ！
四日ばかりも前の朝なりし。

*

家にかへる時間となるを、
ただ一つの待つことにして、
今日も働けり。

いろいろの人の思はく
はかりかねて、
今日もおとなしく暮らしたるかな。

*

おれが若しこの新聞の主筆ならば、
やらむ――と思ひし
いろいろの事！

石狩の空知郡の
牧場のお嫁さんより送り來し
バタかな。

*

外套の襟に頤を埋め、
夜ふけに立どまりて聞く。
よく似た聲かな。

Yといふ符牒、
古日記の處處にあり——
Yとはあの人の事なりしかな。

*

百姓の多くは酒をやめしといふ。
もつと困らば、
何をやめるらむ。

目さまして直ぐの心よ！
年よりの家出の記事にも
涙出でたり。

*

人とともに事をはかるに
適せざる、
わが性格を思ふ寝覺かな。

何となく、
案外に多き氣もせらる、
自分と同じことと思ふ人。

*

自分よりも年若き人に、
半日も氣焔を吐きて、
つかれし心！

珍らしく、今日は、
議會を罵りつつ涙出でたり。
うれしと思ふ。

*

ひと晩に咲かせてみむと、
梅の鉢を火に焙りしが、
咲かざりしかな。

あやまちて茶碗をこはし、
物をこはす氣持のよさを、
今朝も思へる。

*

猫の耳を引つぱりてみて、
にやと啼けば、
びつくりして喜ぶ子供の顔かな。

何故かうかとなさけなくなり、
弱い心を何度も叱り、
金かりに行く。

*

待てど待てど、
來る筈の人の來ぬ日なりき、
机の位置を此處に變へしは。

古新聞！
おやここにおれの歌の事を賞めて書いてあり、
二三行なれど。

*

引越しの朝の足もとに落ちてゐぬ、
女の寫眞！
忘れゐし寫眞！

その頃は氣もつかざりし
假名ちがひの多きことかな、
昔の戀文！

*

八年前の
今のわが妻の手紙の束！
何處に藏ひしかと氣にかかるかな。

眠られぬ癖のかなしさよ！
すこしでも
眠氣がさせば、うろたへて寢る。

*

笑ふにも笑はれざりき——
長いこと捜したナイフの
手の中にありしに。

この四五年、
空を仰ぐといふことが一度もなかりき。
かうもなるものか？

*

原稿紙にでなくては
字を書かぬものと、
かたく信ずる我が兒のあどけなさ！

どうかかうか、今月も無事に暮らしたりと、
外に欲もなき
晦日の晩かな。

*

あの頃はよく嘘を言ひき。
平氣にてよく嘘を言ひき。
汗が出づるかな。

古手紙よ！
あの男とも、五年前は、
かほど親しく交はりしかな。

*

名は何と言ひけむ。
姓は鈴木なりき。
今はどうして何處にゐるらむ。

生れたといふ葉書みて、
ひとしきり、
顔をはれやかにしてゐたるかな。

*

そうれみろ、
あの人も子をこしらへたと、
何か氣の濟む心地にて寝る。

『石川はふびんな奴だ。』
ときにかう自分で言ひて、
かなしみてみる。

*

ドア推してひと足出れば、
病人の目にはてもなき
長廊下かな。

重い荷を下したやうな、
氣持なりき、
この寢臺の上に來ていねしとき。

*

そんならば生命が欲しくないのかと、
醫者に言はれて、
だまりし心！

眞夜中にふと目がさめて、
わけもなく泣きたくなりて、
蒲團をかぶれる。

*

話しかけて返事のなきに
よく見れば、
泣いてゐたりき、隣りの患者。

病室の窓にもたれて、
久しぶりに巡査を見たりと、
よろこべるかな。

*

晴れし日のかなしみの一つ!
病室の窓にもたれて
煙草を味ふ。

夜おそく何處やらの室の騒がしきは
人や死にたらむと、
息をひそむる。

*

脈をとる看護婦の手の、
あたたかき日あり、
つめたく堅き日もあり。

病院に入りて初めての夜といふに、
すぐ寢入りしが、
物足らぬかな。

*

何となく自分をえらい人のやうに
思ひてゐたりき。
子供なりしかな。

ふくれたる腹を撫でつつ、
病院の寢臺に、ひとり、
かなしみてあり。

*

目さませば、からだ痛くて
動かれず。
泣きたくなりて、夜明くるを待つ。

びつしよりと盜汗出てゐる
あけがたの
まだ覺めやらぬ重きかなしみ。

*

ぼんやりとした悲しみが、
夜となれば、
寢臺の上にそつと來て乘る。

病院の窓によりつつ、
いろいろの人の
元氣に歩くを眺む。

*

もうお前の心底をよく見屆けたと、
夢に母來て
泣いてゆきしかな。

思ふこと盗みきかるる如くにて、
つと胸を引きぬ――
聴診器より。

*

看護婦の徹夜するまで、
わが病ひ、
わるくなれとも、ひそかに願へる。

病院に來て、
妻や子をいつくしむ
まことの我にかへりけるかな。

*

もう嘘をいはじと思ひき――
それは今朝――
今また一つ嘘をいへるかな。

何となく、
自分を嘘のかたまりの如く思ひて、
目をばつぶれる。

*

今までのことを
みな嘘にしてみれど、
心すこしも慰まざりき。

軍人になると言ひ出して、
父母に
苦労させたる昔の我かな。

*

うつとりとなりて、
剣をさげ、馬にのれる己が姿を
胸に描ける。

藤澤といふ代議士を
弟のごとく思ひて、
泣いてやりしかな。

*

何か一つ
大いなる惡事しておいて、
知らぬ顔してゐたき氣持かな。

ぢつとして寝ていらつしやいと
子供にでもいふがごとくに
醫者のいふ日かな。

*

氷嚢の下より
まなこ光らせて、
寝られぬ夜は人をにくめる。

春の雪みだれて降るを
熱のある目に
かなしくも眺め入りたる。

*

人間のその最大のかなしみが
これかと
ふつと目をばつぶれる。

廻診の醫者の遲さよ！
痛みある胸に手をおさへて
かたく眼をとづ。

*

醫者の顔色をぢつと見し外に
何も見ざりき——
胸の痛み募る日。

病みてあれば心も弱るらむ！
さまざまの
泣きたきことが胸にあつまる。

＊

寢つつ讀む本の重さに
つかれたる
手を休めては、物を思へり。

今日はなぜか、
二度も、三度も、
金側の時計を一つ欲しと思へり。

＊

いつか是非、出さんと思ふ本のこと、
表紙のことなど、
妻に語れる。

胸いたみ、
春の霙の降る日なり。
藥に噎せて、伏して眼をとづ。

*

あたらしきサラドの色の
うれしさに、
箸とりあげて見は見つれども——

子を叱る、あはれ、この心よ。
熱高き日の癖とのみ
妻よ、思ふな。

*

運命の來て乘れるかと
うたがひぬ——
蒲團の重き夜半の寢覺めに。

たへがたき渇き覺ゆれど、
手をのべて
林檎とるだにものうき日かな。

*

氷嚢のとけて温めば、
おのづから目がさめ來り、
からだ痛める。

いま、夢に閑古鳥を聞けり。
閑古鳥を忘れざりしが
かなしくあるかな。

*

ふるさとを出でて五年、
病をえて、
かの閑古鳥を夢にきけるかな。

閑古鳥——
澁民村の山荘をめぐる林の
あかつきなつかし。

*

ふるさとの寺の畔の
ひばの木の
いただきに來て啼きし閑古鳥！

脈をとる手のふるひこそ
かなしけれ——
醫者に叱られし若き看護婦！

*

いつとなく記憶に殘りぬ——
Fといふ看護婦の手の
つめたさなども。

はづれまで一度ゆきたしと
思ひゐし
かの病院の長廊下かな。

*

起きてみて、
また直ぐ寝たくなる時の
力なき眼に愛でしチユリツプー

堅く握るだけの力も無くなりし
やせし我が手の
いとほしさかな。

*

わが病の
その因るところ深く且つ遠きを思ふ。
目をとぢて思ふ。

かなしくも、
病いゆるを願はざる心我に在り。
何の心ぞ。

*

新しきからだを欲しと思ひけり、
手術の傷の
痕を撫でつつ。

藥のむことを忘るるを、
それさへなく、
たのしみに思ふ長病かな。

*

ポロオチンといふ露西亞名が、
何故ともなく、
幾度も思ひ出さるる日なり。

いつとなく我にあゆみ寄り、
手を握り、
またいつとなく去りゆく人人！

＊

友も妻もかなしと思ふらし——
病みても猶、
革命のこと口に絶たねば。

やや遠きものに思ひし
テロリストの悲しき心も——
近づく日のあり。

＊

かかる日に
すでに幾度會へることぞ！
成るがままに成れと今は思ふなり。

月に三十圓もあれば、田舍にては、
樂に暮せるさ——
ひよつと思へる。

*

今日もまた胸に痛みあり。
死ぬならば、
ふるさとに行きて死なむと思ふ。

いつしかに夏となれりけり。
やみあがりの目にこころよき
雨の明るさ！

*

病みて四月——
そのときどきに變りたる
くすりの味もなつかしきかな。

病みて四月——
その間にも、猶、目に見えて、
わが子の脊丈のびしかなしみ。

*

すこやかに、
脊丈のびゆく子を見つつ、
われの日毎にさびしきは何ぞ。

まくら邊に子を坐らせて、
まじまじとその顔を見れば、
逃げてゆきしかな。

*

いつも子を
うるさきものに思ひゐし間に、
その子、五歳になれり。

その親にも、
親の親にも似るなかれ——
かく汝が父は思へるぞ、子よ。

*

かなしきは、
(われもしかりき)
叱れども、打てども泣かぬ兒の心なる。

「勞働者」「革命」などいふ言葉を
聞きおぼえたる
五歳の子かな。

*

時として、
あらん限りの聲を出し、
唱歌をうたふ子をほめてみる。

何思ひけむ――
玩具をすてておとなしく、
わが側に來て子の坐りたる。

＊

お菓子貰ふ時も忘れて、
二階より、
町の往來を眺むる子かな。

新しきインクの匂ひ、
目に沁むもかなしや。
いつか庭の青めり。

＊

ひとところ、疊を見つめてありし間の
その思ひを、
妻よ、語れといふか。

あの年のゆく春のころ、
眼をやみてかけし黒眼鏡——
こはしやしにけむ。

*

藥のむことを忘れて、
ひさしぶりに、
母に叱られしをうれしと思へる。

枕邊の障子あけさせて、
空を見る癖もつけるかな——
長き病に。

*

おとなしき家畜のごとき
心となる、
熱やや高き日のたよりなさ。

何か、かう、書いてみたくなりて、
ペンを取りぬ——
花活の花あたらしき朝。

*

放たれし女のごとく、
わが妻の振舞ふ日なり。
ダリヤを見入る。

あてもなき金などを待つ思ひかな。
寝つ起きつして、
今日も暮したり。

*

何もかもいやになりゆく
この氣持よ。
思ひ出しては煙草を吸ふなり。

或る市にゐし頃の事として、
友の語る
戀がたりに嘘の交るかなしさ。

*

ひさしぶりに、
ふと聲を出して笑ひてみぬ――
蠅の兩手を揉むが可笑しさに。

胸いたむ日のかなしみも、
かをりよき煙草の如く、
棄てがたきかな。

*

何か一つ騷ぎを起してみたかりし、
先刻の我を
いとしと思へる。

五歳になる子に、何故ともなく、
ソニヤといふ露西亞名をつけて、
呼びてはよろこぶ。

*

解けがたき
不和のあひだに身を處して、
ひとりかなしく今日も怒れり。

*

猫を飼はば、
その猫がまた爭ひの種となるらむ、
かなしきわが家。

俺ひとり下宿屋にやりてくれぬかと、
今日もあやふく、
いひ出でしかな。

＊

ある日、ふと、やまひを忘れ、
牛の啼く眞似をしてみぬ、——
妻子の留守に。

かなしきは我が父！
今日も新聞を讀みあきて、
庭に小蟻と遊べり。

＊

ただ一人の
をとこの子なる我はかく育てり。
父母もかなしかるらむ。

茶まで斷ちて、
わが平復を祈りたまふ
母の今日また何か怒れる。

*

今日ひよつと近所の子等と遊びたくなり、
呼べど來らず。
こころむづかし。

やまひ癒えず、
死なず、
日毎にこころのみ險しくなれる七八月かな。

*

買ひおきし
藥つきたる朝に來し
友のなさけの爲替のかなしさ。

兒を叱れば、
泣いて、寢入りぬ。
口すこしあけし寢顏にさはりてみるかな。

*

何がなしに
肺が小さくなれる如く思ひて起きぬ――
秋近き朝。

秋近し！
電燈の球のぬくもりの
さはれば指の皮膚に親しき。

*

ひる寢せし兒の枕邊に
人形を買ひ來てかざり、
ひとり樂しむ。

クリストを人なりといへば、
妹の眼がかなしくも、
われをあはれむ。

*

緣先にまくら出させて、
ひさしぶりに、
ゆふべの空にしたしめるかな。

庭のそとを白き犬ゆけり。
ふりむきて、
犬を飼はむと妻にはかれる。

對話と感想

利己主義者と友人との對話

B　おい、おれは今度また引越しをしたぜ。
A　さうか。君は來るたんび引越しの披露をして行くね。
B　それは僕には引越し位の外に何もわざわざ披露するやうな事件が無いからだ。
A　葉書でも濟むよ。
B　しかし今度のは葉書では濟まん。
A　どうしたんだ。何日かの話の下宿の娘から縁談でも申込まれて逃げ出したのか。
B　莫迦なことを言へ。女の事なんか近頃もうちつとも僕の目にうつらなくなつた。女より食物だね。好きな物を食つてさへ居れば僕には不平はない。

A　殊勝な事を言ふ。それでは今度の下宿はうまい物を食はせるのか。
B　三度三度うまい物ばかり食はせる下宿が何處にあるもんか。
A　安下宿ばかりころがり歩いた癖に。
B　皮肉るない。今度のは下宿ぢやないんだよ。僕はもう下宿生活には飽き飽きしちやつた。
A　よく自分に飽きないね。
B　自分にも飽きた。飽きたから今度の新生活を始めたんだ。室だけ借りて置いて、飯は三度とも外へ出て食ふことにしたんだよ。
A　君のやりさうなこつたね。
B　さうかね。僕はまた君のやりさうなこつたと思つてゐた。
A　何故。
B　何故つてさうぢやないか。第一こんな自由な生活はないね。居處つて奴

は案外人間を束縛するもんだ。何處かへ出てゐても、飯時になれあ直ぐ家のことを考へる。あれだけでも僕みたいな者にや一種の重荷だよ。それよりは何處でも構はす腹の空いた時に飛び込んで、自分の好きな物を食つた方が可いぢやないか。(間)何でも好きなものが食へるんだからなあ。初めの間は腹のへつて來るのが樂みで、一日に五回づつ食つてやつた。出掛けて行つて食つて來て、煙草でも喫んでるとまた直ぐ食ひたくなるんだ。

A　飯の事をさう言へや眠る場所だつてさうぢやないか。毎晩毎晩同じ夜具を着て寢るつてのも餘り有難いことぢやないね。

B　それはさうさ。しかしそれは仕方がない。身體一つならどうでも可いが、机もあるし本もある。あんな荷物をごつさり持つて、毎日毎日引越して歩かなくちやならないとなつたら、それこそ苦痛ぢやないか。

A　飯のたんびに外に出なくちやならないといふのと同じだ。

B　飯を食ひに行くには荷物はない。身體だけで濟むよ。食ひたいなあと思つた時、ひよいと立つて帽子を冠つて出掛けるだけだ。財布さへ忘れなけや可い。ひと足ひと足うまい物に近づいて行くつて氣持は實に可いね。

A　ひと足ひと足新しい眠りに近づいて行く氣持はどうだね。ああ眠くなつたと思つた時、てくてく寢床を探しに出かけるんだ。昨夜は隣の室で女の泣くのを聞きながら眠つたつけが、今夜は何を聞いて眠るんだらうと思ひながら行くんだ。初めての宿屋ぢや此方の誰だかをちつとも知らない。知つた者の一人もゐない家の、行燈か何かついた奧まつた室に、やはらかな夜具の中に緩くり身體を延ばして安らかな眠りを待つてる氣持はどうだね。

B　それあ可いさ。君もなかなか話せる。

A　可いだらう。毎晩毎晩さうして新しい寢床で新しい夢を結ぶんだ(間)本も机も棄てつちまふさ。何もいらない。本を讀んだつてどうもならんぢや

ないか。

B　ますます話せる。しかしそれお話だけだ。初めのうちはそれで可いかも知れないが、しまひには屹度おつくうになる。やつぱり何處かに落付いてしまふよ。

A　飯を食ひに出かけるのだつてさうだよ。見給へ、二日經つと君はまた何處かの下宿にころがり込むから。

B　ふむ。おれは細君を持つまでは今の通りやるよ。屹度やつて見せるよ。

A　細君を持つまでか。可哀相に。(間)しかし羨ましいね。君の今のやり方は、實はずつと前からのおれの理想だよ。もう三年からになる。

B　さうだらう。おれはどうも初め思ひたつた時、君のやりさうなこつたと思つた。

A　今でもやりたいと思つてる。たつた一月でも可い。

B　どうだ、おれん處へ來て一緒にやらないか。可いぜ。そして飽きたら以前に歸るさ。

A　しかし厭だね。

R　何故。おれと一緒が厭なら一人でやつても可いおやないか。

A　一緒でも一緒でなくても同じことだ。君は今それを始めたばかりで大いに滿足してるね。僕もさうに違ひない。やつぱり初めのうちは日に五度も食事をするか知れない。しかし君はそのうちに飽きてしまつておつくうになるよ。さうしておれん處へ來てまた引越しの披露をするよ。その時おれは、「とうとう飽きたね。」と君に言ふね。

B　何だい。もうその時の挨拶まで工夫してるのか。

A　まあさ。「とうとう飽きたね。」と君に言ふね。それは君に言ふのだから可い。おれは其奴を自分には言ひたくない。

B　相不變厭な男だなあ、君は。
A　厭な男さ。おれもさう思つてる。
B　君は何日か――あれは去年かな――おれと一緒に行つて淫賣屋から逃げ出した時もそんなことを言つた。
A　さうだつたかね。
B　君は屹度早く死ぬ。もう少し氣を廣く持たなくちや可かんよ。一體君は餘りアンビシヤスだから可かん。何だつて眞の滿足つてものは世の中に有りやしない。從つて何だつて飽きる時が來るに定つてらあ。飽きたり、不滿足になつたりする時を豫想して何にもせずにゐる位なら生れて來なかつた方が餘つ程可いや。生れた者は屹度死ぬんだから。
A　笑はせるない。
B　笑つてもゐないぢやないか。

A　可笑しくもない。
B　笑ふさ。可笑しくなくつたつて些たあ笑はなくちや可かん。はは。(間)しかし何だね。君は自分で飽きつぽい男だと言つてるが案外さうでもないやうだね。
A　何故。
B　相不變歌を作つてるぢやないか。
A　歌か。
B　止めたかと思ふとまた作る。執念深いところが有るよ。やつぱり君は一生歌を作るだらうな。
A　どうだか。
B　歌も可いね。こなひだ友人とこへ行つたら、やつぱり歌を作るとか讀むとかいふ姉さんがゐてね。君の事を話してやつたら「あの歌人はあなたの

お友達なんですか。」つて喫驚してゐたよ。おれはそんなに俗人に見えるのかな。

A 「歌人」は可かつたね。

B 首をすくめることはないぢやないか。おれも實は最初變だと思つたよAは歌人だ！ 何んだか變だものな。しかし歌を作つてる以上はやつぱり歌人にや違ひないよ。おれもこれから一つ君を歌人扱ひにしてやらうと思つてるんだ。

A 御馳走でもしてくれるのか。

B 莫迦なことを言へ。一體歌人にしろ小説家にしろ、すべて文學者といはれる階級に屬する人間は無責任なものだ。何を書いても書いたことに責任を負はない。待てよ、これは、何日か君から聞いた議論だつたね。

A どうだか。

B どうだかつて、たしかに言つたよ。文藝上の作物は巧いにしろ拙いにしろ、それがそれだけで完了してると云ふ點に於て、人生の交渉は歴史上の事柄と同じく間接だ、とか何とか。(間)それはまあどうでも可いが、兎に角おれは今後無責任を君の特權として認めて置く。特待生だよ。

A 許してくれ。おれは何よりもその特待生が嫌ひなんだ。何日だつけ北海道へ行く時青森から船に乘つたら、船の事務長が知つてる奴だつたものだから、三等の切符を持つてるおれを無理矢理に一等室に入れたんだ。室だけならまだ可いが、食事の時間になつたらボーイを寄こしてとうとう食堂まで引張り出された。あんなに不愉快な飯を食つたことはない。

B それは三等の切符を持つてゐた所以だ。一等の切符さへ有れあ當り前ぢやないか。

A 莫迦を言へ。人間は皆赤切符だ。

B　人間は皆赤切符！　やつぱり話せるな。おれが飯屋へ飛び込んで空樽に腰掛けるのもそれだ。

A　何だい、うまい物うまい物つて言ふから何を食ふのかと思つたら、一膳飯屋へ行くのか。

B　上は靜養軒の洋食から下は一膳飯、牛飯、大道の燒鳥に至るさ。飯屋にだつてうまい物は有るぜ。先刻來る時はとろろ飯を食つて來た。

A　朝には何を食ふ。

B　近所にミルクホールが有るから其處へ行く。君の歌も其處で讀んだんだ。何でも雜誌をとつてる家だからね。(間)さうさう、君は何日か短歌が滅びるとおれに言つたことがあるね。此頃その短歌滅亡論といふ奴が流行つて來たぢやないか。

A　流行るかね。おれの讀んだのは尾上柴舟といふ人の書いたのだけだ。

B　さうさ。おれの讀んだのもそれだ。然し一人が言ひ出す時分にや十人か五人は同じ事を考へてるもんだよ。

A　あれは尾上といふ人の歌そのものが行きづまつて來たといふ事實に立派な裏書をしたものだ。

B　何を言ふ。そんなら君があの議論を唱へた時は、君の歌が行きづまつた時だつたのか。

A　さうさ。歌ばかりぢやない、何もかも行きづまつた時だつた。

B　しかしあれには色色理屈が書てあつた。

A　理屈は何にでも着くさ。ただ世の中のことは一つだつて理屈によつて推移してゐないだけだ。たとへば、近頃の歌は何首或は何十首を、一首一首引き拔いて見ないで全體として見るやうな傾向になつて來た。そんなら何故それらを初めから一つとして現さないか。一一分解して現す必要が何處にあ

るか、とあれに書いてあつたね。一應尤もに聞えるよ。しかしあの理窟に服從すると、人間は皆死ぬ間際まで待たなければ何も書けなくなるよ。歌は――文學は作家の個人性の表現だといふことを狹く解釋してるんだからね。假に今夜なら今夜のおれの頭の調子を歌ふにしてもだね。なるほどひと晩のことだから一つに纏めて現した方が都合は可いかも知れないが、一時間は六十分で一分は六十秒だよ。連續はしてゐるが初めから全體になつてゐるのではない。きれぎれに頭に浮んで來る感じを後から後からときれぎれに歌つたつて何も差支へがないぢやないか。一つに纏める必要が何處にあると言ひたくなるね。

B　君はさうすつと歌は永久に滅びないと云ふのか。

A　おれは永久といふ言葉は嫌ひだ。

B　永久でなくても可い。兎に角まだまだ歌は長生すると思ふのか。

A　長生はする。昔から人生五十といふが、それでも八十位まで生きる人は澤山ある。それと同じ程度の長生はする。しかし死ぬ。

B　何日になつたら八十になるだらう。

A　日本の國語が統一される時さ。

B　もう大分統一されかかつてゐるぜ。小說はみんな時代語になつた。小學校の敎科書と詩も半分はなつて來た。新聞にだつて三分の一は時代語で書いてある。先を越してローマ字を使ふ人さへある。

A　それだけ混亂してゐたら澤山ぢやないか。

B　ふむ。さうすつとまだまだか。

A　まだまだ。日本は今三分の一まで來たところだよ。何もかも三分の一だ。所謂古い言葉と今の口語と比べて見ても解る。正確に違つて來たのは、「なり」『なりけり』と「だ」『である』だけだ。それもまだまだ文章の上では併用

されてゐる。音文字が採用されて、それで現すに不便な言葉がみんな淘汰される時が來なくちや歌は死なない。

B　氣長い事を言ふなあ。君は元來性急な男だつたがなあ。

A　あまり性急だつたお蔭で氣長になつたのだ。

B　悟つたね。

A　絶望したのだ。

B　しかし兎に角今の我我の言葉が五とか七とかいふ調子を失つてるのは事實ぢやないか。

B　「いかにさびしき夜なるぞや。」「なんてさびしい晩だらう。」どつちも七五調ぢやないか。

B　それは極めて稀な例だ。

A　昔の人は五七調や七五調でばかり物を言つてゐたと思ふのか。莫迦。

B　これでも賢いぜ。

A　とはいふものの、五と七がだんだん亂れて來てるのは事實だね。五が六に延び、七が八に延びてゐる。そんならそれで歌にも字あまりを使へば濟むことだ。自分が今迄勝手に古い言葉を使つて來てゐて、今になつて不便だもないぢやないか。成るべく現代の言葉に近い言葉を使つて、それで三十一字に纒りかねたら字あまりにするさ。それで出來なければ言葉や形が古いんでなくつて頭が古いんだ。

B　それもさうだね。

A　のみならず、五も七も更に二とか三とか四とかにまだまだ分解することが出來る。歌の調子はまだまだ複雑になり得る餘地がある。昔は何日の間にか五七五、七七と二行に書くことになつてゐたのを、明治になつてから一本に書くことになつてゐた。今度はあれを壞すんだね。歌には一首一首各異

つた調子がある筈だから、一首一首別なわけ方で何行かに書くことにするんだね。

B　さうすると歌の前途はなかなか多望なことになるなあ。

A　人は歌の形は小さくて不便だといふが、おれは小さいから却つて便利だと思つてゐる。さうぢやないか。人は誰でも、その時が過ぎてしまへば間もなく忘れるやうな、乃至は長く忘れずにゐるにしても、それを思ひ出すには餘り接穂がなくてとうとう一生思ひ出さずにしまふといふやうな、内から外からかの數限りなき感じを、後から後からと常に經驗してゐる。多くの人はそれを輕蔑してゐる。輕蔑しないまでも殆ど無關心にエスケープしてゐる。しかしいのちを愛する者はそれを輕蔑することが出來ない。

A　待てよ。ああさうか一分は六十秒なりの論法だね。

B　さうさ。一生に二度とは歸つて來ないいのちの一秒だ。おれはその一

秒がいとしい。たゞ逃がしてやりたくない。それを現すには、形が小さくて、手間暇のいらない歌が一番便利なのだ。實際便利だからね。歌といふ詩形を持つてるといふことは、我我日本人の少ししか持たない幸福のうちの一つだよ。(間)おれはいのちを愛するから歌を作る。おれ自身が何よりも可愛いから歌を作る。(間)しかしその歌も滅亡する。理窟からでなく内部から滅亡する。しかしそれはまだまだ、早く滅亡すれば可いと思ふがまだまだだ。(間)日本はまだ三分の一だ。

B　いのちを愛するつてのは可いね。君は君のいのちを愛して歌を作り、おれはおれのいのちを愛してうまい物を食つてあるく。似たね。

A　(間)おれはしかし、本當のところはおれに歌なんか作らせたくない。

B　どういふ意味だ。君はやつぱり歌人だよ。歌人だつて可いぢやないかしつかりやるさ。

A　おれはおれに歌を作らせるよりも、もつと深くおれを愛してゐる。

B　解らんな。

A　解らんかな。(間)しかしこれは言葉でいふと極くつまらんことになる。

B　歌のやうな小さいものに全生命を託することが出來ないといふのか。

A　おれは初めから歌に全生命を託さうと思つたことなんかない。(間)何にだつて全生命を託することが出來るもんか。(間)おれはおれを愛してはゐるが、其のおれ自身だつてあまり信用してはゐない。

B　(やや突然に)おい、飯食ひに行かんか。(間、獨語するやうに。)おれも腹のへつた時はそんな氣持のすることがあるなあ。

歌のいろ〳〵

(一)

○日毎に集つて來る投書の歌を讀んでゐて、ひよいと妙な事を考へさせられることがある。――此處に作者その人に差障りを及ぼさない範圍に於て一二の例を擧げて見るならば、此頃になつて漸く手を着けた十月中到着の分の中に、神田の某君といふ人の半紙二つ折へ横に二十首の歌を書いて『我目下の境遇』と題を付けたのがあつた。

○讀んでゐて私は不思議に思つた。それは歌の上手な爲ではない。歌は字と共に寧ろ拙かつた。又その歌つてある事の特に珍らしい爲でもなかつた。私を不思議に思はせたのは、脱字の多い事である。誤字や假名違ひは何百といふ投書家の中に隨分やる人がある。寧ろ驚く位ある。然し恁麽に脱字の多い

のは滅多にない。要らぬ事とは思ひながら數へてみると、二十首の中に七箇所の脫字があつた。三首に一箇所の割合である。

○歌つてある歌には、母が病氣になつて秋風が吹いて來たといふのがあつた。僻み心を起すのは惡い〱と思ひながら何時しか夫が癖になつたといふのがあつた。十八の歲から生活の苦しみを知つたといふのがあつた。安らかに眠つてゐる母の寢顏を見れば淚が流れるといふのがあつた。弟の無邪氣なのを見て傷んでゐる歌もあつた。金といふものに數々の怨みを言つてゐるのもあつた。終日の仕事の疲れといふことを歌つたのもあつた。

○某君は一體に粗忽しい人なのだらうか？小學校にゐた頃から脫字をしたり計數を間違つたり、忘れ物をする癖のあつた人なのだらうか？――恁麽事を問うてみるからが既に勝手な、作者に對して失禮な推量で、隨つてその答へも亦勝手な推量に過ぎないのだが、私には何うもさうは思へなかつた。進む

べき路を進みかねて境遇の犧牲となつた人の、その心に消しがたき不平が有れば有る程、元氣も顏色も人先に衰へて、幸運な人がこれから初めて世の中に打つて出ようといふ歲頃に、早く既に醫しがたき神經衰弱に陷つてゐる例は、私の知つてゐる範圍にも二人や三人ではない。私は「十八の歲から生活の苦しみを知つた人」と「脫字を多くする人」とを別々に離して考へることは出來なかつた。

○某君のこの投書は、多分何か急がしい事のある日か、心の落付かぬ程嬉しい事でもある日に書いたので、斯う脫字が多かつたのだらう。さうだらうと私は思ふ。然し若し此處に私の勝手に想像したやうな人があつて、某君の歌つたやうな事を誰かの前に訴へたとしたならば、その人は果して何と答へるだらうか。

○私は色々の場合、色々の人のそれに對する答へを想像して見た。それは皆

如何にも尤もな事ばかりであつた。然しそれらの叱咤それらの激勵、それらの同情は果して何れだけその不幸なる青年の境遇を變へてくれるだらうか。のみならず私は又次のやうな事も考へなければならなかつた。二十首の歌に七箇所の脫字をする程頭の惡くなつてゐる人ならば、その平生の仕事にも「脫字」が有るに違ひない。その處世の術にも「脫字」があるに違ひない。——私の心はいつか又、今の諸々の美しい制度、美しい道德をその儘長く我々の子孫に傳へる爲には、何れだけの夥しい犧牲を作らねばならぬかといふ事に移つて行つた。さうして沁々した心持になつて次の投書の封を切つた。

（二）

〇大分前の事である。茨城だつたか千葉だつたか乃至は又群馬の方だつたか何しろ東京から餘り遠くない縣の何とか郡何とか村小學校內某といふ人から歌が來た。何日か經つて其の歌の中の何首かが新聞に載つた。すると間もな

く私は同じ人からの長い手紙を添へた二度目の投書を受け取つた。

〇其の手紙は候文と普通文とを捏ね交ぜたやうな文體で先づ自分が「憐れなる片田舍の小學敎師」であるといふ事から書き起してあつた。さうして自分が自分の職務に對して兎角興味を有ち得ない事、誰一人趣味を解する者なき片田舍の味氣ない事、さうしてる間に豫々愛讀してゐる朝日新聞に歌壇の設けられたので空谷の跫音と思つたといふ事、近頃は新聞が着くと先づ第一に歌壇を見るといふ事、就いては今後自分も全力を擧げて歌を研究する積だから宜しく賴む。今日から毎日必ず一通づゝ投書するといふ事が書いてあつた。

〇此の手紙が宛名人たる私の心に惹起した結果は、蓋し某君の夢にも想はなかつた所であらうと思ふ。何故なれば、私はこれを讀んでしまつた時、私の心に明かに一種の反感の起つてゐる事を發見したからである。詩や歌や乃

至は其の外の文學にたづさはる事を、人間の他の諸々の活動よりも何か格段に貴い事のやうに思ふ迷信――それは何時如何なる人の口から出るにしても私の心に或反感を呼び起さずに濟んだことはない。「歌を作ることを何か偉い事でもするやうに思つてる、莫迦な奴だ。」私はさう思つた。さうして又成程自ら言ふ如く憐れなる小學校師に違ひないと思つた。手紙には假名違ひも文法の違ひもあつた。

○然しその反感も直ぐと引込まねばならなかつた。「羨ましい人だ。」といふやうな感じが輕く横合から流れて來た爲めである。此の人は自分で自分を「憐れなる」と呼んではゐるが、如何に憐れで、如何にして憐れであるかに就いて眞面目に考へたことのない人、寧ろさういふ考へ方をしない質の人であることは、自分が不滿足なる境遇に在りながら全力を擧げて歌を研究しようなどと言つてゐる事、しかも其歌の極平凡な叙事叙景の歌に過ぎない事、さうし

て他の營々として刻苦してゐる村人を趣味を解せぬ者と嘲つて僅に喜んでゐるらしい事などに依て解つた。己の爲る事、言ふ事、考へる事に對して、それを爲ながら、言ひながら、考へながら常に一々反省せずにゐられぬ心、何事にまれ正面に其の問題に立向つて底の底まで究めようとせずにゐられぬ心日毎々々に自分自身からも世の中からも色々の不合理と矛盾とを發見して、さうして其の發見によつて却て益自分自身の生活に不合理と矛盾とを深くして行く心――さういふ心を持たぬ人に對する羨みの感は私のよく經驗する所のものであつた。

○私はとある田舍の小學校の宿直室にごろ〳〵してゐる一人の年若き准訓導を想像して見た。その人は眞に人を怒らせるやうな惡口を一つも胸に蓄へてゐない人である。漫然として教科書にある丈の字句を生徒に教へ、漫然として自分の境遇の憐れな事を是認し、漫然として今後大に歌を作らうと思つて

る人である。未だ嘗て自分の心内乃至身邊に起る事物に對して、その根ざす處如何に深く、その及ぼす所如何に遠きかを考へて見たことのない人である日毎に新聞を讀みながらも、我々の心を後から〳〵と急がせて、日毎に新しく展開して來る時代の眞相に對して何の切實な興味をも有つてゐない人である。私はこの人の一生に快よく口を開いて笑ふ機會が、私のそれよりも吃度多いだらうと思つた。

○翌日出社した時は私の頭にもう某君の事は無かつた。さうして前の日と同じ色の封筒に同じ名を書いた一封を他の投書の間に見付けた時、私はこの人が本當に毎日投書する積なのかと心持眼を大きくして見た。其翌日も來た。其又翌日も來た。或時は投函の時間が遲れたかして一日置いての次の日に二通一緒に來たこともあつた。「また來た。」私は何時もさう思つた。意地惡い事ではあるが、私はこの人がこの下らない努力に何時まで飽きずにゐられるか

に興味を有つて、それとはなしに毎日待つてゐた。

○それが確七日か八日の間續いた。或日私は、「とう〳〵飽きたな。」と思つたその次の日も來なかつた。さうして其後既に二箇月、私は再び某君の墨の薄い肩上りの字を見る機會を得ない。來ただけの歌は隨分夥しい數に上つたが、ただ所謂歌になりさうな景物を漫然と三十一字の形に表しただけで、新聞に載せるほどのものは殆どなかつた。

○私はこの事を書いて來て、其後某君は何うしてゐるだらうと思つた。矢張新聞が着けばたゞ文藝欄や歌壇や小說許りに興味を有つて讀んでゐるだらうか。漫然と歌を作り出して漫然と罷めてしまつた如く、更に又漫然と何事かを始めてゐるだらうか。私は思ふ。若し某君にして唯一つの事、例へば自分で自分を憐れだといつた事に就いてゞも、その如何に又如何にして然るかを正面に立向つて考へて、さうして其處に或動かすべからざる隱れたる事實を

承認する時、其某君の歌は自からにして生氣ある人間の歌になるであらうと。

（三）

○うつかりしながら家の前まで歩いて來た時、出し拔けに飼ひ犬に飛着かれて、「あゝ喫驚した。こん畜生！」と思はず知らず口に出す——といふやうな例はよく有ることだ。下らない駄洒落を言ふやうだが、人は喫驚すると惡口を吐きたるがものと見える。「こん畜生」と言はなくとも、白なら白、ポチならポチで可いではないか——若し必ず何とか言はなければならぬのならば。

○土岐哀果君が十一月の「創作」に發表した三十何首の歌は、この人がこれまで人の褒貶を度外に置いて一人で開拓して來た新しい畑に、漸く樂い秋の近づいて來てゐることを思はせるものであつた。その中に、

燒あとの煉瓦の上に

Syôbenをすればしみじみ

秋の氣がする

といふ一首があつた。好い歌だと私は思つた。（小便といふ言葉だけを態々羅馬字で書いたのは、作者の意味では多分この言葉を在來の漢字で書いた時に伴つて來る惡い連想を拒む爲であらうが、私はそんな事をする必要はあるまいと思ふ。）

○さうすると今月になつてから、私は友人の一人から、或雜誌が特にこの歌を引いて土岐君の歌風を罵しつてゐるといふ事を聞いた。私は意外に思つた勿論この歌が同じ作者の歌の中で最も優れた歌といふのではないが、然し何度讀み返しても惡い歌にはならない。評者は何故この鋭い實感を承認することが出來なかつたであらうか。さう考へた時、私は前に言つた「こん畜生」の場合を思ひ合せぬ譯に行かなかつた。評者は吃度歌といふものに就いて或

狹い既成概念を有つてる人に違ひない。自ら新しい歌の鑑賞家を以て任じてゐ乍ら、何時となく歌は斯ういふもの、斯くあるべきものといふ保守的な概念を形成つてさうしてそれに捉はれてゐる人に違ひない。其處へ生垣の隙間から飼犬の飛び出したやうに、小便といふ言葉が不意に飛び出して來て、その保守的な、苟安的な既成概念の袖にむづと嚙み着いたのだ。然し飼犬が主人の歸りを喜んで飛び着くに何の不思議もない如く、我々の平生使つてゐる言葉が我我の歌に入つて來たとて何も喫驚するには當らないではないか。

○私の「やとばかり桂首相に手とられし夢みて覺めぬ秋の夜の二時」といふ歌も或雜誌で土岐君の小便の歌と同じ運命に會つた。尤もこの歌は、同じく實感の基礎を有しながら桂首相を夢に見るといふ極稀なる事實を内容に取入れてあるだけに、言ひ換へれば萬人の同感を引くべく餘りに限定された内容を歌つてあるだけに、小便の歌ほど歌としての存在の權利を有つてゐない事

は自分でも知つてゐる。

○故獨歩は嘗てその著名なる小説の一つに「驚きたい」と云ふ事を書いてゐつた。その意味に於ては私は今でも驚きたくないことはない。然しそれと全く別な意味に於て、私は今「驚きたくない」と思ふ。何事にも驚かずに、眼を大きくして正面にその問題に立向ひたいと思ふ。それは小便と桂首相に就いてのみではない、又歌の事に就いてのみではない。我々日本人は特殊なる歷史を過去に有してゐるだけに、今正に殆どすべての新しい出來事に對して驚かねばならぬ境遇に在る。さうして驚いてゐる。然し日に百回「こん畜生」を連呼したとて、時計の針は一秒でも止まつてくれるだらうか。

○歷史を尊重するは好い。然しその尊重を逆に將來に向つてまで維持しようとして一切の「驚くべき事」に手を以て蓋をする時、其保守的な概念を嚴密に究明して來たならば、日本が嘗て議會を開いた事からが先づ國體に抵觸する

譯になりはしないだらうか。我々の歌の形式は萬葉以前から在つたものである。然し我々の今日の歌は何處までも我々の今日の歌である。我々の明日の歌も矢つ張り何處までも我々の明日の歌でなくてはならぬ。

（四）

○机の上に片肘をついて煙草を吹かしながら、私は書き物に疲れた眼を置時計の針に遊ばせてゐた。さうしてこんな事を考へてゐた。――凡そすべての事は、それが我々にとつて不便を感じさせるやうになつて來た時、我々はその不便な點に對して遠慮なく改造を試みるが可い。またさう爲るのが本當だ我々は他の爲に生きてゐるのではない、我々は自身の爲に生きてゐるのだ。

○たとへば歌にしてもさうである。我々は既に一首の歌を一行に書き下すことに或不便、或不自然を感じて來た。其處でこれは歌それ〴〵の調子に依つて或歌は二行に或歌は三行に書くことにすれば可い。よしそれが歌の調子その

ものを破ると言はれるにしてからが、その在來の調子それ自身が我々の感情にしつくりそぐはなくなつて來たのであれば、何も遠慮をする必要がないのだ。三十一文字といふ制限が不便な場合にはどし〴〵字あまりもやるべきである。又歌ふべき内容にしても、これは歌らしくないとか歌にならないとかいふ勝手な拘束を罷めてしまつて、何に限らず歌ひたいと思つた事は自由に歌へば可い。かうしてさへ行けば、忙しい生活の間に心に浮んでは消えてゆく刹那々々の感じを愛惜する心が人間にある限り、歌といふものは滅びない。假に現在の三十一文字が四十一文字になり、五十一文字になるにしても、兎に角歌といふものは滅びない。さうして我々はそれに依つて、その刹那々々の生命を愛惜する心を滿足させることが出來る。

○こんな事を考へて、恰度秒針が一回轉する程の間、私は凝然としてゐた。さうして自分の心が次第々々に暗くなつて行くことを感じた。――私の不便

を感じてゐるのは歌を一行に書き下す事ばかりではないのである。しかも私自身が現在に於て意のまゝに改め得るもの、改め得べきものは、僅にこの机の上の置時計や硯箱やインキ壺の位置と、それから歌ぐらゐなものである。謂はゞ何うでも可いやうな事ばかりである。さうして其他の眞に私に不便を感じさせ苦痛を感じさせるいろ〳〵の事に對しては、一指をも加へることが出來ないではないか。否、それに忍從し、それに屈服して、慘ましき二重の生活を續けて行く外に此の世に生きる方法を有たないではないか。自分でも色々自分に辯解しては見るもの丶、私の生活は矢張現在の家族制度、階級制度、資本制度、智識賣買制度の犧牲である。

○目を移して、死んだもの丶やうに疊の上に投げ出されてある人形を見た。歌は私の悲しい玩具である。

土岐哀果

石川は遂に死んだ。それは明治四十五年四月十三日の午前九時三十分であつた。その四五日前のことである。金がもう無い、歌集を出すやうにしてくれ、とのことであつた。で、すぐさま東雲堂へ行つて、やつと話がまとまつた。うけとつた金を懷にして電車に乘つてゐた時の心もちは、今だに忘れられない。一生忘れられないだらうと思ふ。

石川は非常によろこんだ。氷嚢の下から、どんよりした目を光らせて、いくたびもうなづいた。

しばらくして、「それで、原稿はすぐ渡さなくてもいゝのだらうな、訂さなくちやならないところもある、癒つたらおれが整理する」と言つた。その聲は、かすれて聞きとりにくかつた。

「それでもいゝが、東雲堂へはすぐ渡すといつておいた。」と言ふと、「さうか」と、しばらく目を閉ぢて、無言でゐた。

やがて、枕もとにゐた夫人の節子さんに、「おい、そこのノートをとつてくれ、――その陰氣な、」とすこし上を向いた。ひどく瘦せたなアと、その時僕はおもつた。

「どのくらゐある？」と石川は節子さんに訊いた。一頁に四首づゝで五十頁あるから四五の二百首ばかりだと答へると、「どれ、」と、石川は、その、灰色のラシャ帋の表帋をつけた中版のノートをうけとつて、ところどころ披いたが、「さうか。では、萬事よろしくたのむ。」と、言つて、それを僕に渡した。

それから石川は、全快したら、これこれのことをすると、苦しさうに、しかし、笑ひながら語つた。

かへりがけに、石川は、襖を閉めかけた僕を「おい」と呼びとめた。立つたまゝ「何だい」と訊くと「おい、これからも、たのむぞ、」と言つた。

これが僕の石川に物をいはれた最後であつた。

石川は死ぬ、さうは思つてゐたが、いよいよ死んで、あとの事を僕がするとなると、實に變な氣がする。

石川について、言ふとなると、あれもこれも言はなければならない。しかし、まだ、あまり言ひたくない。もつと、じつとだまつて、かんがへてゐたい。實際、石川の、二十八年の一生をかんがへるには、僕の今までがあまりに貧弱に思はれてならないのである。

しかし、この歌集のことについては、も少し書いておく必要がある。

これに收めたのは、大てい雜誌や新聞に掲げたものである。しかし、こゝにはすべて「陰

氣」なノートに依つた。順序、句讀、行の立て方、字を下げるところ、すべてノートのままである。たゞ最初の二首は、その後帋片に書いてあつたのを發見したから、それを入れたのである。第九十頁に一首空けてあるが、ノートに、あすこで頁が更めてあるから、それもそのまゝにした。生きてゐたら、訂したいところもあるだらうが、今では、何とも仕やうがない。

それから、「一利己主義者と友人との對話」は創作の第九號（四十三年十一月發行）に掲げたもの、「歌のいろ〳〵」は朝日歌壇を選んでゐた時、（四十三年十二月前後）東京朝日新聞に連載したものである。この二つを歌集の後へ附けることは、石川も承諾したことである。

表題は、ノートの第一頁に「一握の砂以後明治四十三年十一月末より」と書いてあるから、それをそのまゝ表題にしたいと思つたが、それだと「一握の砂」とまぎらはしくて困ると東雲堂でいふから、これは止むをえず、感想の最後に「歌は私の悲しい玩具である」とあるのをとつてそれを表題にした。これは節子さんにも傳へておいた。あの時、何とするか訊いておけばよかつたのであるが、あの容姿を前にして、全快後の計畫を話されてはもう、そんなことを訊けなかつた。（四十五年六月九日）

明治四十五年六月十五日印刷
明治四十五年六月二十日發行
（定價金五十錢）

（歌集悲しき玩具）

著作權所有

著者　石川一

發行者　東京市京橋區南傳馬町三丁目十番地　西村寅次郎

印刷者　東京市京橋區南紺屋町二十四番地　岡田鍊一

發行所　東京市京橋區南傳馬町三丁目　東雲堂書店
電話京橋一六三九
振替東京五六一四

東京模範印刷所印刷

詳細なる弊堂出版書
目錄は往復はがきに
て御申越次第贈呈す

同じ著者の著書

藪野椋十氏序・定價金六十錢
名取春仙氏畫・送費金六錢

歌集

一握の砂

著者の第一の歌集にして、章を分つこと五、「我を愛する歌」「煙」「秋風のこころよさに」「忘れがたき人々」「手套を脫ぐ時」とし、五百五十一首の歌を收む。すべて追憶と哀傷と諷喩と、自嘲となり、著者の半面の俤はまた名殘りなく本集に依つて窺ふを得。

東雲堂書店出版

純文藝雜誌
北原白秋主幹

ZAMBOA
ザムボア

朱欒

每月一回發行
價一册廿五錢

匂高き朱欒の實はその肌キメ細かにしてつやゝかに、その手觸また冷たくして、新らしき香ひ油のごとし。かの綠を帶びしオレンジ色のなつかしさはわが南方の夕日よりも光强く、淡紫の風味はかの紀州の蜜柑よりさらに床しく鮮かなり。葡萄牙語の Z mboa 長崎訛のザボン、四國のジャボ、みな一にしてその匂のフレッシユにして好もしきはわれらが近代の藝術と等しく、悲みまた相似たり。見よ、その實の熟れ輝くところ、黑猫は長き尾を曳きて「時」のごとくに過ぎゆき、海見ゆる庭園の食卓にはすでに晝間の紅茶薰れり。フオク取りナイフ取り、薄玻璃にリキユルの色をながめ、アスパロガスに白きソースのかなしみを味ひ知るわれらがIntimeなる Dinner のまどゐに、かの品よく、髮わけし佛蘭西の流行なつかしく何時もかゝる日の小歌など口ずさみつゝあえかにも訪づれ來るは誰ぞや。——東雲堂出版——

東雲堂書店發行圖書

歌集	桐の花	北原白秋	定價金八十五錢	送資金六錢
詩集	思ひ出	北原白秋	定價金九十錢	送資金六錢
詩集	邪宗門	北原白秋	定價金八十五錢	送資金六錢
戯曲集	午後三時	吉井勇	定價金壹圓	送資金八錢
戯曲集	和泉屋染物店	木下杢太郎	定價金壹圓	送資金八錢
歌集	別離	若山牧水	定價金七十錢	送資金六錢
歌集	收穫	前田夕暮	定價金七十錢	送資金六錢
歌集	一握の砂	石川啄木	定價金六十錢	送資金六錢
歌集	悲しき玩具	石川啄木	定價金五十錢	送資金六錢
詩集	霧	河井醉茗	定價金五十五錢	送資金六錢
詩集	路傍の花	川路柳虹	定價金五十錢	送資金六錢
論集	演劇新聲	小山内薫	定價金八十錢	送資金八錢
詩集	夜の葉	森川葵村	定價金六十錢	送資金六錢
歌集	黃昏に	土岐哀果	定價金五十錢	送資金六錢
評傳	哲人カアペンター	石川三四郎	定價金八十錢	送資金八錢